

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（三〇）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』三（明治書院、二〇〇六年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記底本には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（二）（二七） 応永三二年～三二年（一四一六～一四二四）『米沢史学』三〇～三八号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五八号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～五〇号（二〇一四～二〇二三年）

○現代語訳（二八） 応永三二年（一四二五）一月一日から四月二九日『米沢史学』三九号（二〇二三年）

○現代語訳（二九） 応永三二年五月一日から八月二八日『紀要』五九号（二〇二三年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三二年九月一日から一二月三日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに底本に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

本稿をもって『看聞日記』現代語訳の連載は終了する。『看聞日記』後半の現代語訳は前半の現代語訳とあわせて、別途、出版する予定である。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出

一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊（明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二一年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

同「『看聞日記』の舞楽記事を読む」（『文学部論叢』一三八号、二〇一五年）

同「『看聞日記』の引用表現について」（『古文書研究』九二号、二〇二二年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭齊『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

九月一日、晴。いつものように月初めのお祝いをした。御香宮の祭礼を見物した。同じく相撲も見た。田向前参議・重有・長資朝臣・慶寿丸・具侍者・梵祐らも連れて行った。相撲は六～七十番取っていた。とても面白かった。六日、晴。午後七時に石清水八幡宮の前社務である田中の坊舎が焼けた。火の取り扱い違いだそう。類焼には及ばなかったが、延々と焼け続けた。去年、神人の訴訟により社務職を剥奪された。その挙げ句、自分の家も焼

け失ってしまった。もしかしたら神様のご意向に背いていたのではなからうか。

八日、晴。御香宮の御旅所に行った。その後、風呂に入った。いつものように夜、菊綿の露を酒に入れて飲んだ。

ところで明日、後小松上皇様が泉涌寺へお参りされるそう。昨年からご意願だったが、これまで延期していたという。

九日、晴。夕方から夜に至るまで、雨が降った。「重陽の佳い時節で、とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。

その後、田向家に行き、いつものように御香宮の祭礼を見物した。私の息子・娘・宮家の女性たちら上下皆、見物に來た。真乗寺麗首座も來たので、同じく一緒に行った。麗首座は法安寺の田地を塔頭・大通院にご寄付する書類を持参してきた御使者であった。

午後五時に、御神輿などの祭礼行列がいつものようにやって來た。今年の祭礼当番幹事は三木与一善康である。祭礼見物をしながら、特に三献の酒宴を終えて、座を立った。

#### 室町殿舎弟・隆侍者が伏見に來た

ところで室町殿の弟である隆侍者が退蔵庵にいらっしゃったそう。山田宮の猿樂と御香宮の相撲を見物なさりに來たそう。そこで、見物席を禅啓に命じて用意させた。ただし雨が降ったので、猿樂も相撲も延期になってしまった。田向前参議を通して、隆侍者に伏見來訪のお礼を申し上げた。

【頭書】（日記の上方の隙間に書き加えた記事）いつものように、琵琶と和歌などの百日稽古をした。

十日、晴。いつものように獅子が來て舞いをした。褒美を与えた。

今夜、山田宮の猿樂と御香宮の相撲が開催された。隆侍者も見物なさったそう。

#### 後小松上皇、泉涌寺に行幸する

ところで後小松上皇様は泉涌寺へ午前七時半にご出発されたという。泉涌寺では、舍利会などの法会が厳かに執り行われたそう。寺ではご軽食を用意していたが、お召し上がりにならなかった。お茶ばかりお飲みになったそう。そして午後一時にお帰りになった。その後、崇賢門院や室町殿

御所へお立ち寄りになった。この訪問は兼ねてからお決りになっていたことだという。

#### お供の公卿

洞院満季内大臣はお寺で待ち合わせていた。正親町三条公雅大納言・裏辻実秀大納言・徳大寺実盛大納言・事務取扱者である万里小路時房大納言・裏松義資中納言・勤修寺経興前中納言・御太刀を持つ役をした西園寺公名中納言・飛鳥井雅世参議・山科教豊右衛門督・御沓を持つ役をした日野秀光朝臣

#### 殿上人

東坊城長政朝臣・白川雅兼朝臣・河鱈実村朝臣・五条為清朝臣・冷泉為之朝臣・八条公興朝臣・高倉永豊・東坊城益長

#### 六位の北面の武士

御沓を持ち御膳を運ぶ役をした源康基・御太刀を持つ役をした源康久・御笏を持つ役をした源康秋・藤原定衡・紀光弘・藤原久国

#### 御壺召次（※）

路次で御沓を持つ役をした竜夜叉・菊千代・光若・幸代・光鶴・菊松・幸竹・千代菊

#### 御身固（※）

賀茂在方三位

※御壺召次（おんつぼのめしつぎ）：上皇御所の雑事に従事した下級の職員。

※御身固（おんみがため）：上皇の身体安全を護持祈禱する陰陽師。

#### 法安寺と権現の猿樂を観る

十一日、晴。法安寺の猿樂を見物しに行った。息子・東御方・上臈・二条殿・今参・麗首座・田向前参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・具侍者・聖乗・梵祐・塔頭大通院の稚児・局女の女々・女官ら大勢で行った。

まず住職の部屋で一献の酒宴をした。その後、見物席に入った。隆侍者も見物を希望したので、彼の分の見物席も用意されていた。猿樂は五番演じられた。猿樂の役者に褒美として青銅製の香炉・燭台・花立を内々に与えた。夜に入り猿樂が終わってから、寺を出た。

その後、いつものように御香宮や権現などの猿樂が開催された。権現の

猿楽もまた見物した。小川禅啓に命じて、見物席を作らせた。いつものように同じく禅啓が一献の酒宴を用意してくれた。隆侍者もまた一緒に見物した。隆侍者から小袖一着と錢三貫文が猿楽の役者に与えられた。深夜に及ぶまで猿楽五番が演じられた。私からも太刀一振りを役者に与えた。猿楽が終わってから宮家に帰った。

十三日、晴。珠侍者が来た。珠侍者は隆侍者の使者として先日のお礼を言いに来られたので、「こちらこそ、わざわざ御使者をお送りいただき、恐れ多くも嬉しいことです」とお返事した。とても丁寧な対応なので、嬉しかった。

ところで毎月恒例の連歌会、先月は祐誉が当番幹事だった。しかし差し障りがあるといって、当番勤仕を先送りしてきた。それで今夜は名月なので連歌会の当番を勤めるように、兼ねてから命じたら、中途半端に了承をしていた。ところがまた今日も当番をさぼった。乱暴な振る舞いであり、非常識極まりない。

ただ名月を黙って見過ごすわけにはいけないので、急に連歌を懷紙一折り分詠んだ。参加者が少なかったので、五十韻詠んだところで中断した。

#### 室町幕府御所の門前に落書の札が立つ

ところでただ今聞いたところでは、去る頃、室町殿御所の門前に落書らくしょの札が立ったそうだ。

諸国より 相撲は多く 上れども

王と御所との しつつき（※） ぞなき

その後、重ねてまた落書の札が立った。

相撲より 止めたきものは 二つあり

大内の下り（※） 御所の黄衣（※）

室町殿は最初の落書に腹を立てて、諸大名が相撲を楽しむことを禁止なさった。その後、大内盛見が室町殿にお暇をいただいて西国へ下ったので、このような落書がまた書かれたようだ。黄衣とあるのは、室町殿がいつも黄色い法衣を着ていらっしやるので、このように書かれたのであろう。

※「しつつき」：尻付き（しりつき）で、人の後ろに付き従う人のことか。

天皇や将軍に付き従う者がいないことを揶揄したか。

※「大内の下り」：周防国・長門国・豊前国の守護である大内盛見が北九州の戦乱を鎮圧するため、帰国すること。

※「御所の黄衣」：足利義持が黄色い法衣を着ていることを指す。義持が臨済宗に対して異常なまでに傾倒していることを揶揄した。

#### 大光明寺大通院に盗人が入り、龍湫筆の不動明王像が盗まれる

十四日、晴。朝早く塔頭大通院に盗人が入った。龍湫筆の不動明王像一舗・青銅製の花瓶一つを盗んだ。すぐに盗人を見付けて追っ手を差し向けたが、遂に行方が分からなくなったそうだ。

この不動明王像は院主の用健が秘蔵している守り本尊である。紛失したのは、残念なことだ。

昨日の連歌会を引き継いで、百韻を詠み終わった。

#### 綾小路信俊と田向経良が和睦する

ところで綾小路信俊前参議と田向経良前参議が仲違いしている件で、田向前参議が頻りに仲直りしたいと願っているので、仲を取り持ててやった。それで綾小路が田向を許すことを承諾した。そして今日、田向前参議が京都に出かけて、綾小路前参議の許へ向かったそうだ。帰ってきて、快く仲直りしたと報告してきた。めでたいことである。

#### 崇光上皇の守り本尊である龍湫筆の不動明王像

十五日、晴。用健がいらっしゃった。盗人を探し出せず、不動明王像を失ってしまい、残念ですと話していた。それで崇光上皇の守りご本尊である、同じく龍湫筆の不動明王像三幅を塔頭大通院に寄付する内容の書類を差し上げた。ただしこの不動明王像は他所に預け置いてあるので、（二字分欠落あり）進上すると話しておいた。

夜、妻・二条殿の部屋で双六の勝ち抜き戦（※）をした。私・宮家の女性たち・麗首座・重有朝臣で双六を打った。

※「勝ち抜き戦」：底本では「打ち勝ち」とある。

十六日、晴。いつものように身を浄めた。法安寺へ行った。仁王経を読んで祈祷した（この後二字分欠落あり）。即成院念仏の法会に参列しに行った。十七日、晴。上皇様へ泉涌寺へのお出かけが無事終わったことをお祝いする手紙を差し上げた。



ところで祐譽僧都が連歌の当番幹事を勤めると言い出した。それで急に毎月恒例の連歌会をすることとなった。参加者はいつもの面々である。

十八日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。桃李花二帖・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・海青楽・平蛮楽・鳥急を演奏した。田向長資は太鼓を打った。

#### 石清水八幡宮・賀茂社両社行幸記録

ところで上皇様から昨日のお返事があった。そして石清水八幡宮・賀茂社両社へ天皇がお参りした記録にご用事があるので、適宜捜して進上してほしいとのご命令があった。「このような記録に覚えがありませんが、なんとか捜し出してみます」と内々に冷泉永基朝臣を通してお返事を差し上げた。

#### 麗首座と旧交を温めた

麗首座が寺に帰った。この間、宮家に滞在してくれていた。古くからの誼があるので、昔話に花が咲き、懐かしかった。

#### 八幡・賀茂部類記・延久御記

二十日、晴。石清水八幡宮・賀茂社両社へ天皇がお参りした記録として、八幡・賀茂部類記二巻と平手箱一箱に入った延久御記を永基朝臣を通して上皇様へ進上した。すぐにお返事があった。

#### 建久五年御記

御記録をいただき、特にうれしく思っという。建久五年御記がさらに御入用だとのご命令もあった。この記録は持っていない。どうしようか。

#### 小川宮の遺書裏に法華経外題と仮名書き阿弥陀經を書写する

ところで勧修寺経興の老母が、法華経一部の外題と仮名書きの阿弥陀經一卷を私に書写してほしいとお望みだそう。いずれにしても私は能書ではないので遠慮したいと返答した。しかし、どうしても言われたので、執筆することにした。

この御経の料紙は、亡くなった上皇様の二男である二宮殿直筆の書類の裏だそう。勧修寺家では二宮殿を養っていたので、残されたご筆跡の裏にお経を書写して、お守りのお経としたいそう。

#### 畠山満家が不浄負けとなる

さて室町殿は今日、伊勢神宮にお参りに出かけるはずだった。ところが急に延期となったそう。その理由は、同行する畠山満家管領にお見送りの一献を申し入れ、その酒宴の最中に馬屋の馬三頭が一度に倒れたことにあるという。不思議なので、陰陽師の賀茂在方に占わせたところ、不浄負け（※）だそう。

#### 畠山家の役夫二人が田舎で鹿を食べたのが不浄負けの原因

それで畠山家中の者どもを調べたところ、人夫二人が田舎で鹿を食べたことを白状した。同じ火で作った食べ物と彼らとともに管領もお食べになったので、管領の参宮を延期させるために神が馬を死なせたらしい。神様の思召しはいよいよ恐ろしいものである。それで今後七十五日間、伊勢神宮にお参りすることは叶わなくなったそう。

※不浄負け（ふじょうまけ）：穢れた身体で神事及びその関連事業に携わったことによる体調不良などの症状をいう。

二十四日、晴。いつものように風呂に入った。

#### 金光寺が焼失する

昼に大炊御門大路と西洞院大路の交差点あたりの四〇五町が焼けたそう。律僧の寺である金光寺も焼失したという。

ところで円光院堯範法印の病状がひどいらしい。お祈りのための領地である比地は、堯範一代限りの領地となっている。ところが、堯範の死後三年間も比地を円光院の領地として認めてほしいと、山田香雲庵主を通して願ひ出てきた。

他の先例などいろいろなことを考え合わせると、この願ひ出を承認するのは困難である。しかしお祈りをきちんと続けるといので、堯範の死後三回忌までは円光院が比地を支配することは問題ないという内容の書類を送った。

また醍醐寺三寶院満済が石清水八幡宮に籠もって七日間、護摩を焚く法会をするそう。今年から四季ごとに諸門跡寺院が交替当番で護摩を焚くという。

二十五日、晴。紅葉を観て廻った。蔵光庵に行き、その後、即成院へ行った。

田向前参議・重有・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。即成院ではちよつとした一献の酒を寺僧に用意させた。

#### 琵琶法師の語一座頭と安一座頭

ちようど琵琶法師の語一・安一の両人が即成院に来て、平家語りや雑芸などいろいろとやってくれた。とても面白かった。それで酒盛りとなった。数献飲み終わって、宮家へ帰った。

語一は初めて伏見に來た。相一・檢校の弟子だそう。安一はたびたび伏見に來ている。この人は千一・檢校の弟子である。この二人の座頭はこれから和泉国や河内国方面へ向かう予定だそう。それで水無瀬へ紹介状を書いてほしいというので、書いてやった。

#### 後小松上皇の清水八幡宮・賀茂神社両社行幸は十一月

二十九日、晴。田向前参議が京に出て、帰ってきてから世間話をしてくれた。石清水八幡宮・賀茂神社両社への上皇様の参詣は十一月と決まったそう。室町殿のご祈祷、最近はお修寺新門主が勤仕なさっているという。これは、初めてのことだ。

三十日、晴。知恩院僧正が來たので、面会した。僧正は一献の酒を持参して來たので、田向前参議以下も参加して酒宴となった。僧正はこの二・三年音沙汰がなかったので、珍しい来訪である。うれしかった。夕方になって、帰っていった。

#### 諸神が出雲国へ出かける奇瑞

その後、大雨が降り、雷も鳴ってびっくりした。これは諸神が出雲国へお出かけになる、めでたい前兆なのだろうか。雷が木幡に落ちて、大地が震えたという。

聞くとところによると、今日、上皇御所で千句の御連歌会があったそう。孟冬朔（十月一日）、「めでたい兆しがあり、とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

#### 細川満元家の女性・尼たちが宮家に乱入する

二日、晴。女性や尼たち二十人あまりが御所内に乱入し、室内を見廻している。見苦しい所なので、見られると差し障りがある。彼女たちは、細川満元前管領の女性や尼たちらしい。この辺りの紅葉を遊覧し、光台寺でお弁

当を食べていたそう。そして酒に酔った勢いで、御所に乱入したようだ。よろしくないことだ。

#### 円光院堯範法印が亡くなる

ところで聞くとところによると、円光院堯範法印が昨日亡くなったそう。お祈りの領地である比地をめぐってこの間まで連絡を取り合っていたので、特に嘆き悲しむ思いが強い。故藤原能子・典侍・禪尼が亡くなった名残が尽きないうちに今回のことがあり、あれやこれやでとても悲しく嘆かわしい。堯範の跡を継ぐべき弟子はいないそう。比地は、堯範の三回忌を過ぎたら円光院から宮家に返すようにと、堯範が遺言したそう。

また聞いたところでは、法性寺親平朝臣がこの前、死去したという。法性寺親平は綾小路信俊前参議の弟子である。これでまたさらに雅楽を演奏する者が少なくなった。日本国として、無念なことである。

#### 廊御方の御恩地である播磨国余田・近江国塩津荘

五日、晴。廊御方が御恩地の支配承認を連々と申し入れなされるので、今日承認書を送った。播磨国余田は廊御方死後十三年間、近江国塩津荘は死後七年間、それぞれ山田香雲庵の所領とすることを間違ひなく認めた。そしてそれぞれの年期が過ぎたら、宮家へお返し下さいと私の手紙に書いて送った。

#### 宮家仕女の御恩地は通常、一期領主である

およそ宮家に仕えた女性の御恩地は、その一身限りのものである。特別な場合でも死後三年間、返却を猶予するのが、古来連綿と行われた仕来りである。そこで、十三回忌に至るまで領地返却を猶予するのは過分な褒賞なのである。しかし廊御方の宮家勤務は特別であったので、特例扱いとして領地支配の承認を出した次第である。

#### 廊御方の養女

山田香雲庵にも同じ趣旨の承諾書を与えた。香雲庵には幕府近臣桃井の娘が廊御方の養子として、遺産のすべてを譲与することになっているそう。

以前は四条隆直大納言入道の娘と養子縁組の契約をしていた。それで前庵主の時から既にこの娘は香雲庵に居住していたが、男性関係が原因で逃

げ出してしまったのだ。よろしくない事である。

聞くとところによると、内野御経(※)の法会が今日から始められたそうだと。  
※内野御経(うちのおんきょう)：平安京大内裏の跡である内野を供養するためにお経を読む法会。

### 称光天皇の御湯始め

八日、雨が降った。称光天皇陛下が御病氣になって以後、初めてお風呂にお入りになったそうだと。二条持基関白・一条兼良右大臣・洞院満季内大臣・室町殿以下皆が、御馬・太刀などを陛下に進上したそうだと。ただし関白と右大臣は御馬の代わりに銭を進上したという。

宮家からは馬を用意することができなかったのだ、進上しなかった。残念なことである。

陛下の医師寿阿へ、山のようなご褒美を下さったそうだと。

九日、晴。今夜は亥子である。いつものように亥子餅を食べた。

十日、晴。天皇陛下・上皇様へ、陛下がお風呂にお入りになったことをお祝い申し上げた。陛下からはすぐにお返事があった。恐れ多くも嬉しいことである。

### 伏見荘は水損で長講堂領役を果たすことが難しい

島田定直六条庁官が来た。伏見荘が洪水で被害を受けたので長講堂への所役を勤めることが難しいと、御堂の事務取扱者に申し入れてきた。それに対して定直は、御堂の所役を勤めないわけにはいきませんと申し入れてきたのである。また遣り繰りが大変になる。

### 長講堂領には年に二度目の段銭が課せられた

長講堂の領地にはまた臨時税が課せられた。伊勢国車荘を天皇陛下の御料所として進上する。その替わりとして上皇様へ銭を差し上げるために、臨時税を課したのである。ところが、この春にも上皇様ご直筆法華経御八講の法会のため、臨時税が既に懸けられている。一年の内に二度も臨時税が課せられるのは、先例にないことである。領地を預かっている者たちは慌てふためいて、言葉に表せないほどひどい状況だそうだと。

この伏見荘には今回の臨時税はおかけにならないようだ。ご免除に預かり、めでたいことである。定直と対面して詳しく話し合った。

### 薪順事を始める

十一日、晴。とても寒い。順番で薪を焼く会を長資朝臣と梵祐を当番として始めた。面々でくじを引いて、いつものように幹事の順番を決めた。田向前参議らが今後の当番にあたった。

### 上皇御所御持仏堂・御会所の造営開始

聞くとところによると、今日から上皇御所の御持仏堂と御会所の御工事が始められたそうだと。

十三日、晴。蒼玉庵主が一献の酒を持参して来た。思いがけないことで、対面して酒を飲んだ。この酒宴には田向前参議らも参加した。

十四日、晴。上皇御所の持仏堂、今日が立柱式だそうだと。諸人が御馬を引いて献上したという。上臈が外出なさって、しばらく実家に逗留するそうだと。

山田香雲庵主が来た。

十五日、晴。毎月恒例の連歌会、慶寿丸と行光の二人が当番幹事で、いつものように準備してくれた。

### このところ連々、付け火あり

ところで聞いたところによると、今日の明け方、相国寺の塔頭である大徳院が火事になったそうだと。このところ、毎日のように放火が続いている。しかし今回は火を打ち消したのだが、とうとう焼け落ちてしまったそうだと。天魔の所行であろうか。

十六日、晴。姪の鳴滝殿が来た。

ところで大徳院は小堂・僧堂・山門が焼けただけで、それ以外の建物は無事だったそうだと。盗人が火を付けたようだ。それで火災の最中、走り来た僧たちによって盗人は捕まり、獄舎に監禁されたそうだと。この間、室町殿は因幡堂にお籠もりになっていたという。

十七日、とても寒い。雪が舞い散っている。田向前参議が京都に出かけた。六条殿長講堂の寺役を伏見荘が勤める件で、御堂の事務取扱者と話し合うことがあったのである。

十九日、晴。田向前参議が帰ってきた。長講堂の事務取扱者から厳しく申し入れされたそうだと。

二十一日、晴。亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。



二十四日、晴。風呂に入った。午後九時に小さな地震があった。

後小松上皇と足利義持に蜜柑を献上した

二十五日、時雨が時々降った。上皇様に蜜柑を二籠献上した。

室町殿にも同じく二籠、勧修寺経直中納言を通して進上した。田向前参議がこの蜜柑を勧修寺に持参した。

室町殿に訴える件があったので、それを訴状に書き載せて訴訟の用意をするよう、勧修寺中納言に申し付けた。蜜柑一籠を同じく勧修寺にあげた。田向前参議は京都に泊まるそうだった。室町殿宛ての蜜柑は、勧修寺中納言が受け取り、進上すると言っていた。上皇様から蜜柑のお返事が来た。

妻の庭田幸子が妊娠する

さて妻の二条局が妊娠して着帯の儀式をした。陰陽師の賀茂在方が着帯の儀式の吉日を占ってくれた。帯の祈禱は智恩院隆守僧正が勤めてくれた。着帯の世話は芝殿がしてくれた。佳い例に任せて、いつものようにお祝いをした。

二十六日、晴。鳴滝殿がお寺に帰った。

二十七日、晴。重有朝臣が京に出かけた。一方、田向前参議が帰ってきた。昨日、蜜柑を室町殿のお目につけたそうだった。室町殿のお返事も聞いてきた。

伏見荘の両土倉に対する課税増徴案

私の訴訟の件で、勧修寺中納言が意見をしてくれた。私の訴訟は、伏見荘にいる二人の土倉に対する課税を増徴することにある。京都市内における土倉への課税について事務取扱者に事情を聞いてから、室町殿がお返事を下さるそうだった。

二十八日、晴れていたが、夜に雨が降った。上臈が実家から帰ってきた。数日、実家に留まり、さぞや賑やかに過ごしたことであろう。

九州合戦は大内盛見が勝利した

重有朝臣も帰ってきて、世間話をしてくれた。九州の合戦では大内盛見が勝利して、少弐満貞が退いたそうだった。少弐一族のうち二人が殺されたという。

十一月一日、雨が降った。いつものように月初めのお祝いをした。お祝いには重有朝臣らが参列した。田向前参議は京都に出ていった。

二日、晴。夜に即成院で一献の酒宴が用意された。即成院の梵祐と善基が酒宴に奉仕してくれた。毎年冬に必ず酒宴を即成院で用意するのが、佳い先例となっている。

連歌会を急に行うこととなった。重有・長資朝臣らが参加した。明け方までかかって百韻詠み終わった。

三日、朝は晴れていたが、昼から夜中、雨が降り続いた。

相国寺仏殿の立柱式

聞くとところによると、今日の午前七時半、相国寺仏殿の立柱式が行われたそうだった。五山以下の臨濟宗寺院が礼物を献上したという。それで大光明寺からも銭十貫文を長老が持参したそうだった。

田向前参議が帰ってきた。勧修寺に訴訟のための私の書状を渡してきた。勧修寺は室町殿にお見せしますと言っていたそうだった。

四日、晴。玄忠が酒樽一つ持参して来た。

世尊寺経朝詞書の常盤絵

ところで真乗寺殿から常盤絵二巻をいただいた。素晴らしい絵である。詞書は世尊寺経朝三位だそうだった。これを世尊寺行豊に見せたら、確かに経朝卿の筆跡だと言っていた。この絵は真乗寺が所持していたものだそうだった。

大地震

五日、晴。午前九時に大地震があった。所々の築地塀が崩れるほどの、とても大きな揺れだった。火神が動いたという占いの内容は軽々しいものではない。称光天皇陛下・後小松上皇様・室町殿は特にご謹慎なさるべきだと、陰陽師が占ったそうだった。今日は冬至である。

六日、晴。勧修寺に書状を送った。私の訴訟の準備をするようにとの連絡を入れたのである。

七日、晴。永円寺長老の賢了が来た。祈祷報告書とお茶二十袋を持参して来た。対面した。住職に任命されたので、その御挨拶に来たそうだった。

九日、晴。内裏では今夜から三日間、内侍所御神楽が行われるという。綾小路信俊前参議は、この御神楽に出仕するために忙しいとのこと。この御神楽は天皇陛下のご病氣平癒の祈願だそうだった。

先日の地震で厳しく御謹慎をするよう占われたので、陛下も室町殿も驚

かれて、諸社・諸寺・諸門跡にご祈祷をお命じなった。五山寺院でも大般若經が音読された。今月から来月まで大般若經の音読を続けるようにと、室町殿がご命令になったそうだ。

#### 地震・鳴動・勸進僧頓死と天下怪異が続く

十日、晴。昨夜午後十一時に地震があった。大きな地響きがした。また火神が動いたのだ。

龜山將軍塚も、立て続けに大きな音をたてて揺れ動いたそうだ。このころしばしば世間で起こる怪異は、何ごとの前触れなのだろうか。

室町殿が清水寺にお籠もりなさっていたら、御堂勸進の僧が急死したそう。それで清水寺全域が穢れてしまったので、急いでお寺を出られたという。室町殿の代理として賀茂在方三位がお籠もりするそう。この事件も室町殿がお籠もり中のことであり、不思議な事である。

後に聞いたところでは、内侍所御神楽を始める頃に地震が二回あったそう。

十五日、雨が降った。風呂に入った。

十六日、晴。即成院念仏の法会に参列した。少し酒を飲んだ。午後七時、また地震があった。

十七日、寒い風が吹いていた。夕方には雪が風に吹き飛ばされながら降っていた。

#### 山田香雲庵主である廊御方が雪見酒を献上する

十八日、晴。雪が少し積もった。ただし霜のような感じだった。山田香雲庵主である廊御方がお酒が献上された。前々、廊御方が宮家にいる時から、初雪の時に雪見酒を用意して下さった。以前と変わらず、恒例として献上してくるとは、神妙なことである。用健がいちゃった。

#### 犬に狸を噛み殺させる

十九日、晴。舟津(※)で狸一匹が打ち殺されていた。生島清賢と幸若の仕業らしい。犬に噛み殺させたようだ。

※「舟津」：底本では「旧舟津において」とあるが、誤記であろう。

二十日、晴。父・大通院の祥月命日なので、ささやかな仏事を執り行った。即成院老僧の梵基・同院の善基・法安寺住職・梵祐・禅照庵主らを招いて、

いつものように一時間、読経した。仏前で面々は軽食を摂った。その後、塔頭・大通院へ行き、焼香した。大光明寺長老にもお会いした。

二十二日、晴。午前七時に小さな地震があった。金翅鳥が動いたのだ。

#### 舟津で狸が連々と打ち殺される

今日もまた舟津で狸が打ち殺された。その後も引き続き、四〇五匹殺されたそう。希に見ることであろう。

二十五日、晴れていたが、夜には雨が降った。毎月恒例の連歌会、当番の田向前参議が準備した。会衆はいつもの面々だった。夜に入って百韻詠み終わった。

#### 山田香雲庵に盗人が入る

今夜、山田香雲庵に盗人が入り、少し物品を取られたそう。もしかしたら内部事情に詳しい者の犯行かもしれない。

今夜は北野天満宮で御神楽があるそう。地震など世間で起こっている怪異のためのご祈祷だという。

二十七日、晴。風呂に入った。その後、薪を焼く会を当番の重有朝臣が用意した。山田香雲庵主である廊御方も来た。いつものように宮家の男女全員が参加した。

#### 九日は最後日で、世間ではこの日に儀式をすることを忌む

ところで慶寿丸の元服式が予定されている。まず日時を陰陽師の賀茂在方三位に尋ねたところ、来月九日と十五日が吉日だと占ってきた。ただし九日は最後日(※)なので、世間ではこの日に儀式を行うことは忌まれている。

#### 陰陽師は最後日を関知しない

それでどうしたものだろうかと再度、在方に尋ねたところ、陰陽道で最後日というのは関知していませんということだった。これはひとえに阿闍梨の説(※)であり、それで陰陽師は関知しないのであろう。

#### 娘三歳魚味の日程

また三歳の娘の御魚味の日時についても聞いてみた。来月二日と十二日が良いでしょうとのことだった。

※「最後日」：未詳。一桁の日数、最後の日ということか。



※「阿闍梨の説」：仏僧の説という意味。真言宗関係の伝承か。

二十八日、晴。薪を焼く会、いつものように当番の東御方が準備した。

三十日、晴。室町殿が北野天満宮にお籠もりしており、今日は舞楽があつたそう。

### 足利持氏が足利義持の猶子となることを望む

ところで関東武將足利持氏殿の御使者として、建長寺の長老が上京してきた。いろいろなことを申し入れたそう。その一つとして、「室町殿に御息子がないので、持氏殿が御養子として上洛しお仕えします」との申し入れがなされたという。

### 足利義持は持氏の使者と対面せず

このことは難しい案件なので、室町殿は長老と対面しなかったそう。十二月一日、晴。「良い兆しがあり、すべての事においてめでたい」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

### 貞成四女三歳の魚味祝

二日、晴。私の四女である娘の御魚味のお祝いをした。良い先例に基づき、田向経良前参議が娘に魚味を口に含ませた。山田香雲庵主・芝殿・重有・長資ら朝臣がお祝いに参列した。田向前参議が大きな酒甕である酒海を献上した。一献の酒宴が度重なって、ただひたすらお祝いをした。

### 【頭書】いつものように等持寺の法華八講が今日から開始された。

三日、晴。重有朝臣が京に出かけた。勤修寺へ使者として派遣したのである。また冷泉永基朝臣にも相談することがあった。

五日、晴。薪を焼く会、いつものように当番の田向前参議が準備してくれた。六日、夜に雨が降った。夕方になって急に連歌をすることになった。長資朝臣が月ごとの当番幹事をまだ勤めていないので、自分が準備すると言いつ出したのだ。いつもの面々が集まった。ただし具侍者と聖賢らも参加した。深夜になって百韻を詠み終わった。

七日、晴。風呂に入った。その後、順番で薪を焼く会を開催した。上臈が当番幹事である。山田香雲庵主である廊御方も参加した。

ところで慶寿丸の成人式が明後日に決まったので、父の庭田重有朝臣はその準備にかかりつきりだった。

### 慶寿丸の元服

九日、慶寿丸の成人式が午前十一時に行われた。烏帽子を被せる役は田向経良前参議、髪を整える役は田向長資朝臣が務めた。お祝いの儀式が丁寧に行われた。村人たちも小川禅啓以下、ほとんどの者が皆参列したようだ。烏帽子の役をした田向前参議には太刀一振り・銭三貫文の引き出物が渡された。髪を整える役にも引き出物が渡されたそう。髪を整える役には庭田家から太刀などが出されたようだ。

### 慶寿丸の実名は「重賢」

その後、宮家御所へ一献の酒を持参して来た。新成人の慶寿丸も挨拶に来た。成人式でつけられた実名は「重賢」であった。実はこの実名、既に父・大通院が決めていた命名であった。私の御前で一献の祝宴が行われた。宮家の女性たちは庭田家に招待されて行った。上・下総じて大勢が集まった大きな行事となった。無事に儀式が終わって、とてもおめでたいことである。

### 青侍幸若も元服した

なお小川禅啓の末子で宮家の侍を務めている幸若も、同じく今日、成人した。

### 【西御方三条治子の命日】

十日、晴。故西御方三条治子殿の年忌供養で、塔頭・大通院でささやかな仏事を行った。

私は宮家で、いつものように身を淨めて、お経を読んだ。

十一日、晴。田向前参議が私の使者として勤修寺家に向かった。

ところで、先月の連歌会の時、良い点が付けられた句を詠んだ者を褒め称えるとして、勝負することになった。そして重有朝臣の句に最も良い点が付いたので、皆で彼を褒め称えた。

そこでまた急に連歌会をすることになった。参加者は重有朝臣らいつもの面々である。深夜に及んで百韻を詠み終わった。今度もまた良い句を争う勝負となった。

### 金翅鳥が動き、地震となった

午前一時に地震があった。金翅鳥が動いたのであろう。

### 宮家の訴訟は難しいと勸修寺は難色を示した

十三日、晴。田向前参議が帰ってきた。勸修寺から話が合った。勸修寺は、いずれにせよ、この訴訟を準備するのは難しいと言いつ出した。「なまじつか貞成様の書状が必要だと申しましたが、よく考えてみると、このような書状を出すことじたい、よろしくないと思います」とのことだった。

### 瓦が炉から飛び出て碎けた怪異

ところてただ今聞いたところによると、去る十日、御香宮で御千度参りを村人が行っていた。これは年末の祈祷であり、毎年恒例の行事である。そしてお弁当を食べるために酒を沸かしていたところ、炉の瓦が躍り出て散々に碎けてしまったそう。そのために酒を入れた容器も傾き、酒が流れ出してしまったという。もしかしたら、これは怪異だろうか。よくわからないと村人たちが話し合ったそう。

陰陽師の賀茂在方勘解由小路三位が来年の暦と八卦占いの本を献上してきた。私の息子にも同じく献上してきた。

### 瓦の怪異は翌年の退蔵庵の火事を示したものか

【頭書】瓦が炉から飛び出したことを後に思い合わせると、次の年の三月七日に退蔵庵が火事になった。退蔵庵は御香宮の近所なので、この怪異はこの火事を示したものであったのかもしれない。不思議な事である。

十四日、晴。陰陽師の土御門有盛三位が来年の御暦を献上してきた。同有清も同じく献上してきた。我が息子に対しても同じく献上してきた。

十五日、晴。西大路隆富朝臣が来て、当番幹事として毎月恒例の連歌会を準備してくれた。参加者はいつもの面々である。一献の酒宴を少し整えて行った。夜に入って百韻を詠み終わった。

十六日、雪が降って、少し積もった。田向前参議と隆富朝臣が一献の雪見酒を用意してくれた。私もまた酒を用意した。それで数献の酒宴となり、さらに酒盛りとなった。隆富朝臣が宮家に滞在しているので、連歌会を懐紙一折り分、また私が主催した。参加者はいつもの面々である。

### 火神が動き、小さな地震がおこる

今日の明け方、小さな地震があった。火神が動いたようだ。

十七日、晴。隆富朝臣が帰っていった。

十八日、雪が降った。東御方が雪見の酒宴を主催なさった。

### 六条殿長講堂の寺役

さて島田定直六条庁官が来た。六条殿長講堂の寺役を大光明寺以下寺庵が勤めようとしないので、御堂の事務担当者から厳しく叱責する書状が出された。定直は大光明寺に行き、討論した。いずれにしても先例のない寺役なので負担する必要はないと、大光明寺住職は断言なさったそう。他の寺庵も同じように言っている。

それに当年は水害になっているのでそのように厳しく取り立てることは困難だから、寺庵の分の寺役はまず免除するように、私から定直に言った。そして伏見荘のそれ以外の分については寺役を負担させると定直に話しておいた。

### 庭田幸子の私的な新順事の会に、貞成が推参する

夜に入ってもなお、雪は降り続いた。妻の二条の部屋で私的に順番で薪を焼く会を行っていた。当番は田向前参議だそう。私はその当番には入っていないが、妻の部屋に押し入った。そして雪見酒を楽しんだ。

十九日、なお雪が降っている。昨日から降り積もった。近頃になく大雪で、その雪景色はとも興味があつた。重有朝臣がお酒を持参して来たので、酒を飲んだ。

### 庭田幸子、次男を産む

ところで今夜午前一時、妻の二条殿が出産した。男の子が誕生した。それに母子共に無事ということで、めでたいことである。

### 節分で、方違えをする

二十日、晴。いつものように煤払いをしてお祝いをした。今夜は節分である。方違えとして殿上の間に一泊した。そしてお祝いをした。お祝いには田向前参議らも参加した。

### 立春を強飯で祝う

二十一日、晴。「立春の佳い時節、めでたい兆しがあり、すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように強飯で立春のお祝いをした。お祝いには田向前参議らも参加した。

二十三日、晴。石清水八幡宮の西竹という社務が解任され、善法寺が社務に返り咲いた。今日、その命令が出されたそうだ。西竹はたった二年しか社務を務めていない。さぞや社務の職に執着していることだろう。

二十六日、雪が降った。町経時朝臣が年末の挨拶に来た。豊原郷秋も来た。皆、対面した。

#### 上皇御所の女房・右衛門督局が酒樽などを献上する

ところで、上皇御所の女房・右衛門督局が酒樽などいろいろな物を献上してきた。思いがけないことで、うれしかった。これは、円光院のお祈り領地である比地を、死後三年間は円光院の支配地として私が認めたことによる。そのお礼として献上してきたのであろう。すぐに味わった。田向前参議らも味わった。

今日、八朔憑みの返礼品を正親町三条公雅大納言・葉室宗豊中納言・芳徳庵主に送った。今まで返礼が遅れたのはよろしくないことだった。

二十七日、晴。山田香雲庵主である廊御方が来た。薪を焼く会の当番幹事をお勤めに来たのだ。一献の酒宴が終わって、風呂に入った。年末のこととして身を淨めた。

夕方、惣得庵主理勝と明元らが酒樽を持参して来た。

二十九日、雨が降った。蔵光庵が、恒例の進物をいろいろと献上してきた。またいつものように播磨国国衙領（※）の特産品を勧修寺が献上してきた。

#### 趙子昂の漢詩墨跡

八朔憑みの返礼品として趙子昂の漢詩墨跡一幅・杉原紙十帖を勧修寺経興中納言に送った。この墨跡は宮家で大事にしていたものである。山田香雲庵主と冷泉永基朝臣にも同じく返礼品を送った。今まで返礼が遅れたのはよろしくないことだった。

※国衙領（こくがりょう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。

#### 大光明寺住職や寺庵主たちが群参して歳末の参賀に来る

三十日、夜に雪が降った。用健が来た。大光明寺長老以下寺庵の庵主たちが年末の挨拶に来た。毎年、この日に僧たちが群参して挨拶に来るのが

佳例となっている。いつものように除夜のお祝いをした。お祝いには田向前参議らも参加した。明春からもめでたく喜ばしい、満足の日々がくるよう念願するのみである。

応永三十二年の宮家でのいろいろな事柄や世間での噂話を詳しく記録した。ただし記録として残す事に憚りもある。今後、他家の者にこの記録を見せてはいけない。必ず火中に投じて焼き捨てるように。（続）

【追記】『看聞日記』はまだ続きますので（続）と記しました。しかし今年度で私は山形県立米沢女子短期大学を定年退職しますので、連載はここでいったん終了いたします。永らくのご声援やご叱正、まことにありがとうございます。ここまで連載が続けられましたこと、読者の皆様のご後援の賜物であると、改めて厚く感謝申し上げます。今後は日記の後半部分も含めて、本という形で現代語訳をまとめられればと考えておりますので、暫くの間、お待ちいただければ幸いです。なお、旧稿や本稿について何かお気付きの点があれば、sonobetoshiki@gmail.com までご連絡下さい。（蘭部寿樹）